蒼星石が世界を救う

シェング

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
蒼星石が世界を救う

【Ｎコード】
Ｎ１５４９Ｌ

【作者名】
シェング

【あらすじ】
ｎのフィールドからＤＱ３の世界に飛び込んだ蒼星石。彼女を待ち受ける運命はいかに。

旅立ちの朝―ｐａｒｔ１―（前書き）

ＤＱ３の世界観を崩したくない方、ローゼンメイデンのイメージを崩したくない方は素直に見ないほうがいいです。二次創作なので、気分を害しない方のみ見てください。

旅立ちの朝―ｐａｒｔ１―

目が覚めると辺りは木々に囲まれていた。差しこむ日差しのつられて日の当たる方へと僕は歩いていた。そこからの景色はそびえたつ広大な自然。そして大きな滝を見た。

「私の声が聞こえますね…まずあなたのまことの名を教えてください」

「僕の名前は……蒼星石……」

まだ頭が重いまま質問に答える。矢継ぎ早に私の質問に答えろと言われ、考えることなく感覚で「はい」「いいえ」を繰り返した。

「あなたは思いやりが強く、人の気持ちになって考えることができる」

「そう、あなたは素晴らしいです。ごうけつという性格が相応しいです」

その言葉と同時に僕の目が本当に覚めた。あれは夢だったのだろうか。

「おきなさい。おきなさい私のかわいい蒼星石や」

誰かが僕を呼んでいる。黒い視界が徐々に明るくなっていく。

「今日はおまえが１６歳になる日、旅立ちの許しを王様からもらって来なさい。私はこの日のために勇敢な男のように育て上げたつもりです」

え……なんのことだろう。そうだ、僕たちはｎのフィールドを彷徨っていて……ここはどこなのだろう……

考える間もなく、自称お母様らしき人に連れられて王様に挨拶に行くように言われた。見張っているので仕方なく謁見に行くことにしよう。王様は僕のことを男に勝るとも劣らないと告げた。僕ってそんなにごついのかなぁ……

王様の長い話も終わりわかったことがいくつかある。お父様の名前はオルテガということ。僕は勇者であること。倒すべき敵は魔王バラモスであること。そしてここはアリスゲームを行っていた僕たちのいた世界ではないということだ。

どうやら僕はこの厄介な世界で魔王を倒すしかないようだ。もらったものは５０Ｇ・こんぼう２・たびびとのふく２・そしてぬののふくだ。正直、期待しているのだろうか。

アリアハンという城からお触れが出た。この世の中にあるタンス・タル・つぼ・宝箱は勝手に持って行っていいという権利だ。これが一番重要だろう。

貧弱な装備ではどうにもならない。仕方なしに僕は城の中をあさった。タンスの中に金色に光るメダルを見つけた。売れないし持っておこう。

僕は仲間を作る必要はなかった。どうせ、危険な旅についてくる奴だなんていやしない。それに、この世界に未練はもちたくなかった。町を出る。さわやかな風が吹いてくる。橋を渡ると狂暴化した大きな鴉が飛びかかってきた。数は三匹。僕の攻撃はひらりとかわされた。やはり、鋏ではなく、剣なのが扱いずらい原因だろう。

たった、一回の戦闘で僕の体力は限界に近付いていた。家に帰って今日は休もう。ここで一日を終える。

```
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                
```

旅立ちの朝―ｐａｒｔ１―（後書き）

こっちは気合いで続けるよ！

頑張ってみよう。

私のサイトです

ｈｔｔｐ：／／ｓｈｅｎｇｎｏｖｅｌ．ｂｌｏｇ６９．ｆｃ２．ｃｏｍ／

鍵を渡す使命を持つ老人―ｐａｒｔ２―

二日目の朝。それは思ったよりも体が重かったことが気になる。が、そんなことは気にせずに前に進むしかなかった。そしてまたもやモンスターに遭遇した。なにか可愛い物体と、大きな鴉だ。後で聞いたことだが、あれはスライムというモンスターらしい。

剣を交えることなく、一刀両断されていく魔物達。悪く思わないでね。世界を僕は救わなきゃならないんだ。

遠くに待ちが見えて気を抜いた瞬間にモンスターの大群に襲われた。初めて僕は敵の前で逃げた。やくそうを飲みひたすら歩く。村が見えてきたところで先程の大群が追ってきた。命からがら逃げに逃げて、僕はレーベと言う村に辿り着いた。

邪魔な服は売っておく。これで王様も満足だろう。岩の前で立ち往生している人がいたので岩をどけてみる。そこにはまたも、小さなメダルが置かれていた。もちろんもらっておく。

レーベでは一通り物色をした。そしてアリアハンへとまだ戻る。いったい僕は旅というものをしているのだろうか。

ここの世界では魔物を倒すと経験値が上がり、特殊な魔法を使うことができる。ＭＰという精神力を犠牲にして火の弾をぶつけるメラと言う魔法を僕は覚えた。

そして僕は家に帰り、睡眠をとった。優しいお母様だ。僕はお父様にこういう風に扱われていたのだろうか。

三日目の朝。大群がいきなり襲ってくる。厳しい戦闘だったが、それは乗り越えた。そしてその直後に家に戻る。凄い恥ずかしい。たった一度の戦闘でボロボロになる身体が。耐えきれない精神力が。それでも僕は家に帰る。

四日目の朝。旅に立つと言っておきながら、自分の家に寝泊まりする日々。他の人はどう思っているんだろうか。若干世間体が気になるところだ。

夜、ようやく忍び込んだ家でメダルを見つけた。流石に王宮には忍び込ませてくれないらしい。自分の家に行くとお母様が待っていた。まさか、来ない日でもずっとずっと待っていてくれたのだろうか。涙がこぼれるのを感じた。僕はあなたの娘ではないというのに。これだけ尽くしてくれていることが。その夜は涙が止まらなかった。

五日目の朝。起きると目が赤くなっていた。朝ごはんを食べずにこそこそと家を出ていく。レーベに向かおうとしたが、南の方角に洞窟を見つけたので入っていく。さっそく宝箱、中にはやくそうが入っていた。

モンスターの狂暴性はこの近くではありくいやうさぎ、人の顔をした蝶に肥大化したカエルがいた。自然破壊のものだろうか。そう考えているとまた一つ宝箱。そこには使い古されているたびびとのふくが置いてあった。いったい誰がこんなじめじめとしたところで脱ぎ捨てていったのだろう。モンスターと一戦交えて自分を回復する魔法を覚えた。ホイミと言って長旅では重要なものらしい。

５６Ｇというものが宝には入っている。おかしいな。ここで散って行った人たちの残滓なのだろうか。

洞窟の中に階段があるので登ってみると、塔のようなところに出た。そこからはアリアハンもレーベも見えた。

初めて登る塔の印象は宝箱が多いことと、モンスターの数が多い。きっと誰も来ないことをいいことに住処にでもしているのだろう。

うろうろと回っていく。さっきも同じところに来た気がする。あれ。僕ってこんな方向音痴だっけ……。

頂上に登るとはそこにはお爺さんが一人いた。そのお爺さんは夢で僕に鍵を渡すという使命があったらしい。鍵を受け取ったと同時にお爺さんはまた眠りに着いた。

本があったのでちょっと読んでみる。タイトルはおてんばじてん。あれ、子供のころが懐かしいな。お父様に作られた時はみんな仲が良かったっけ……みんな元気かなぁ。ふふふ。楽しかったなぁあのころは。

塔を降りて、キメラのつばさを放り投げるとアリアハンに帰ってきた。開けられなかった場所を開けて、僕は色々なものを手に入れた。本当に僕は勇者でいいのだろうか。こんな疑問がわくのはもう日常茶飯事になってきている気がする。

井戸の中に光るものを見つけた。そこには売れないメダルを集めているというおじさんが居た。僕は五枚持っているということで、棘の鞭をもらった。真紅じゃなくても鞭って使えるんだね。と思い彼女を思い出しながら僕はこの鞭を振るう。

今までは一対一の戦闘で、後ろから攻撃されることもあったが、群れを一掃できるのが強みになった。真紅はこんな感じでこれを使っていたのかなと思うと笑いが込み上げてきた。そしてＭＰが尽きていて、もう夜だったので家に帰り眠ることにした。明日は新天地に行きますお母様。

鍵を渡す使命を持つ老人―ｐａｒｔ２―（後書き）

蒼の子は可愛いなぁ。

私のサイトです

ｈｔｔｐ：／／ｓｈｅｎｇｎｏｖｅｌ．ｂｌｏｇ６９．ｆｃ２．ｃｏｍ／

次にやるべきこと―ｐａｒｔ３―

もう一週間がたとうとしていた。レーベには魔法の玉を作っているという老人が居る。そこを鍵を使い開けると、またもや老人が待っていた。その老人と昨日の塔の老人と関係しているのだろうか。僕を見ると魔法の玉を差し出してくれた。

勇者という肩書きも便利なものだと思い始めている僕が居る。

人の顔を持った蝶が出てきた。マヌーサという呪文を唱えると相手が分身し始めた。僕の攻撃が当たらない。冷や汗が流れる。だが下手な鉄砲も数撃ちゃ当たる。何回か鞭を振り回していると自然とモンスターが居なくなっていた。

祠にはまたもやお爺さんが居た。この世界はお爺さんが多いのだろうか。

洞窟に入ると壁が行く手を塞いでいたので、魔法の玉で吹っ飛ばすことにした。なんて爆発だ。僕まで吹っ飛びそうになった。ローザミスティカに近いものがあるのだろうか。

敵は一味違った。狂暴＋強さを増している。一筋縄では行かないのかもしれない。

階段を下りると、三又に分かれている道を見つける。僕から見て右手の方向に進むことにした。渦巻いているものに躊躇なく飛び込んだ。もう怖いものはない。

どこかに移動でもしたのだろうか。眼の前にはアリアハンとは違うお城があった。城に入りやることは強盗。やってて寂しくなってくる。

ここの大陸ではモンスターは強いようだ。なにより虫が気持ち悪い。お城の北に村があったのでそこに立ち寄ることにした。時間はもう夜。やることは決まっている。アリスってなんだろうか。

鏡があったのでアリアハンと村をつないだ。一瞬でアリアハンに

戻ることができた。メダルは１０枚集まったのでガーターベルトをもらった。
うふっ。少しだけ恥ずかしい。けどなんだか嬉しい。今の装備はおかしいような気もするけど、細かいことは気にしない。お城はロマリア、村はカザーブと言うようだ。
旅の記録を王様に記してもらった。
僕の冒険は歯車を少し進めた。

すぐにロマリアに行こうと思ったのだけれど、ＭＰがないので自分の家で寝ることにした。もう僕はここに馴染んできている気がする。これでいいのかな。お母様も喜んでくれているし。
一泊してからる―らと言う魔法で鏡を創り出しそこから一度見た地域に移動する。ちょっと面倒だけど、これでいい。
ロマリア近辺の敵は強い。火の玉がひゅんひゅん飛んでくる。服が燃えたら恥ずかしいじゃないかまったくもう……
精神力がホイミ一発分しか残っていないので城の周りをうろうろとする。城の街灯をちらりと見ているすきに魔法使い四人が襲ってきた。
急に火の玉をぶつけられ意識が遠のいていった。。。
目を開けるとアリアハンに戻っていた。どうやら完全に身体を失わない限りは生きているようだ。
「ない……」
財布の中身を見ると半分に減っていた。この世界では死ぬ、もしくは気絶してしまうとお金が半分になるらしい。ただ、お金を半分払うだけで魂は無くならないことは得なのではないかとポジティブに考えることにした。
一人はつらいのかな。僕の力じゃ。
そんなことを思いながらもふらふらと西に向かって橋を渡ろうした時、空飛ぶ猫が現れた。
鞭を構えたが先手を取られてしまった。四匹とも攻撃が早い。三

匹の攻撃を耐え、鞭で全員を叩く。が、誰も倒れてくれない。そしてすぐに逃げて。橋を渡り南下する。
でかいサルの攻撃をひらりとかわし、戦闘を拒否する。やっとの思いで町に着く。ここまでになると装備が弱いのかもしれない。きのぼうしやかわのよろいではこの先は苦労してしまうだろうきっと。
町に入ってまずやることは物色。これももう恒例行事だ。やらなければ僕が死ぬ。もう死にたくはない。
「あなたしってますか？」
「知らない」
いきなり初対面の人に失礼じゃないのだろうか。挨拶も何もない。ただ、有益な情報はあった。西の砂漠にはイシスという国があるらしい。
砂漠を越えることが僕にできるのだろうか。それが不安で仕方ない。
僕の……この世界のお父様はカギを求めて南に向かったと言っているのを聞いた。何年も前のこと。同じ軌跡をたどっているのだと思うと、僕は少し胸が熱くなった。
「俺もあの男のようになりたいものだ」
尊敬されているお父様。この世界のお父様はすごい人だったらしい。
今日はすでにボロボロ。ルーラで町を記憶できたし、宿屋で寝ることにした。ベッドに少し砂が入っている。砂漠に近いせいなのかなと思い、星を見ながら眠りに就いた。

早朝、早速ルーラでロマリア近辺に行き力をつけることにする。力のない正義は無謀にしかならない。僕はまだ無力だ。
どういうわけか身体の動きが少し鈍い。相手の方が先に動いてくる。どうしてもダメージが蓄積してしまい、今日は一泊することにした。

昨日と同じことを繰り返す。ホイミして、戦闘を繰り返す。
前を見るとすごろくという遊戯を行っている場所に辿り着いた。ワクワクしながら辺りを見ていると上からいきなり人が降ってきた。これにはちょっとびっくりだ。
すごろく券はすでにたくさん拾ったり、もらったりしていたのでサイコロを振ることにした。
サイコロは十回振れるようだ。四が出て宝箱を開けた。中身はせいなるナイフ。換金しよう。分岐点で次は三が出た。北に向かい？のマスに止まった。怪しげな声が僕に囁く。よくわからないことを繰り返しているが要は知っていることを知っていると、知らないことを知らないと。
それだけで頭がよくなったようだ。
またもや分岐点では一が出た。前はダメージ床、左はサイコロを投げる回数が増える。これは左に進むしかないよね。ね。
続いて五が出る。いい感じでサイコロを振る回数が三回も増えた。僕って運がいいのかな。と思い始めてくる。
安定して進んでいき、ゴールはもう目の前だ。
草むらを調べることはできるが絶対に調べない。僕は自分の運があまり良くないことを知っているからね。
案の定というか、落とし穴に落ちて終わってしまった。
そして敵を狩ることにする。狩る方が狩られるとはね。巨大芋虫に攻撃を食らって倒れる。死んでも死なないのはいいけど臨死っていや……だね……

「おお　蒼星石！死んでしまうとはふがいない！」
言われなくてもわかっている。魔王どころか普通のモンスターにも負けてしまうのだから、
僕の装備がこの大陸のモンスターに耐えれないことを知った。城下町の人々の特異な者を見るような視線はこの装備だったからなのか。

……お金が足りない。仕方ないからモンスターを倒してお金を稼ぐしかないようだ。
お金が４００Ｇを超えたところで深夜になったのでロマリアでまた一泊することに。
どうやら武器のとげのむちは高水準の武器だが、防具は下の下と言ったところである。
「身体が痛い……今日はもう眠ろう」
ところどころ血が滲んでいる服を見て布団にもぐった。

そういえば、盗賊のカギを手に入れてからアリアハンを調べていない気がする。色々探索すると、塔へと続く洞窟へと続いていた。
少し霧雨が降っていて足を滑らせるとまっさかさまに落ちていきそうだ。
次に魔法の玉で爆発させた場所。ここは、駆け抜けたため何も探していない。途中紫色の兎に眠らされたが無事倒れることなく、宝箱の回収を完了した。
今日はこの辺にしておこう。ロマリアの王様に冒険の書を記してもらった。
すると新たな頼みごとされてしまった。
「カンダタと言う者がこの城から金の冠を奪っていったのじゃ。是非取り戻してくれ。取り戻したのならばそなたを勇者と認めよう」
別に僕にとって勇者の肩書きなんて必要ない。けれども、助けてと求めるのならば行くしかない。僕は勇者の娘なのだから。

次のやるべきことが決まった。カンダタを倒して、金の冠を王様に返還しようと。

次にやるべきこと―ｐａｒｔ３―（後書き）

ＤＱ内の勇者は相変わらず押し入りと変わらない気がする

私のサイトです興味があればどうぞ。

ｈｔｔｐ：／／ｓｈｅｎｇｎｏｖｅｌ．ｂｌｏｇ６９．ｆｃ２．ｃｏｍ／

麻痺の恐怖―ｐａｒｔ４―

カンダタを倒して手に入れるためにまずは防具を整えることにした。くさりかたびらを買いかわのよろいとはおさらばすることにした。

同じくかわのたてを売り払い青銅の盾を仕入れた。相手の攻撃があまり痛くなくなっていた。不思議だ。

ダメージを全く受けつけない。この防具は頑丈でいいものだと思った。少々動きにくいのだけど。

調子に乗ってアッサラームの方角へと進んでいく。強くなった防具を試したかったから。

でかいサルに飛ぶ猫。調子に乗りすぎてあっさりと死んでしまう。蘇った場所はロマリアだった。冒険の書を記したところで蘇るようだ。

それでも防具は強い。ダメージが激減している。正確に言うのなら8から5に下がった。

仲間がいた方が心強いのだろうが、僕には……必要ない。

カニ達が仲間を呼んでいるのを見て不意にそんなことを考えた。たびびとのふくを手に入れた。これはこいつらの毒牙にかかった人々なのだろう。

しかし、なんの憤慨も起きることはなかった。当然だ。知らないのだから。

五匹の大群に襲われ、素早さをそぎ取られ、ここで倒れた。僕はもう何度死んだんだ。

しかしもう死ぬのにも慣れちゃったなぁ。嫌だけど。

う……途中気持ち悪い色のカエルにあって毒に侵されてしまったらしい。あぁ、歩くごとにめまいが激しくなっていく。不思議と戦闘中はＨＰは減らないようだ。システムがおかしいとしか僕には言えない。

カザーブに立ち寄り、神父さんに汚れをはらってもらう。どうもこの世界の神父さんは無料で奉仕をしたりはしないそうだ。必ずお金をとる。例え勇者であろうともだ。
武器屋に立ち寄ると城下町よりもいいものを売っている。村の文明も凄いなぁ。
裏から家に忍び込み、毛皮のフードを見つけたので迷わずもらっていく。木の帽子よりは軽いし、ちょっと可愛いかな。
カザーブを出て東に向かう。先程情報を得てカンダタはシャンパーニの塔を拠点にしているらしい。
塔に入る頃にはもう日は暮れていた。
一歩足を踏み入れる。……汗臭い。流石男の人がたくさんいる塔だ。男の人に話しかけてみると
「ここは盗賊がたくさん住んでいる場所だ」
「はぁ……」
この人も盗賊なのだろうか。モンスターも放し飼いしているし、カンダタって凄い人なのかな。
塔をさらに登っていると、二人の男を見つけた。
「おーい変な奴らが来たぞー！」
「おい！おかしらに知らせに行くぞ！」
そう言って上に登っていく。煌びやかな紅い絨毯に、紅茶が乗っている二つの丸テーブル。これが盗賊の住処なのか。豪勢すぎる気がする。
けれども、僕は盗人を逃がしたりはしない。階段を上ると四人が待ち構えていた。棘の鞭を構えると、覆面の男が、指をパチリと鳴らすと床が開き、下の階層に落とされた。
くっ、不覚だ。すぐに上に行こうとすると右側からうおおおおおおおおおおおおおという声が聞こえてくる。
僕も右側から下に降りた。すると四人が陣形を組んでいて、ふふふ。と不敵に笑っている。
おい！そこのお前達！と叫びそうになったが、あいにく僕の力は

限界に達している。ふらふらとよろめきながら宝箱が目に付いたので、開けると青銅の盾があった。ちょっと買ってしまったのが残念だ。

塔を自力で降りて、キメラのつばさを使いアッサラームに飛び立った。宿屋に泊り全快する。

寝るだけで回復するなんて馬鹿げている。塔に置いてあった青銅の盾を売り鉄の鎧を買った。

イシスと言う国を思い出して、砂漠の国を目指した。

敵の猛攻をかいくぐるように逃げていく。これが勇者なのか。と魔物達からも哀れな視線が飛んでくる。

ここは暑いせいか、汗が噴き出してくる。

汗。人間がかくものだ。僕は今アリスに近いのかもしれない。アリスを体験しているのかもしれない。これが辛い旅だとしても、それだけが救いだった。

ルーラでカザーブに飛び、またシャンパー二の塔を目指す。もちろん金の冠を取り戻すためだ。

意気揚々と進軍するところに虫の群れ。煩わしいと思いつつ鞭を構えると先に尻尾で刺された。

「え……？」

身体が動かない。自分の意志で動くことができない。

「ま……ひ……か」

モンスターにいいように嬲られ城に戻ることになった。

虫は怖いな。そう思う冒険になった。

麻痺の恐怖―ｐａｒｔ４―（後書き）

続きですけれども、感想とかバシバシくれると励みになるのでありがたいです。

私のサイトです興味があればどうぞ。

ｈｔｔｐ：／／ｓｈｅｎｇｎｏｖｅｌ．ｂｌｏｇ６９．ｆｃ２．ｃｏｍ／

シャンパーニの塔の激戦―ｐａｒｔ５―

マヒで倒れてしまったが、ここでへこたれるわけにはいかない。またシャンパーニの塔に進んだ。

入ってすぐにキラービー。こいつのせいで……こいつのせいで僕は……

殺気を感じたのかやつはすぐに逃げて行った。これが虫の知らせと言うやつだろう。

僕はここらへんで思うことがある。殺られる前に殺れ。これがルールだということに。

そういえば何も探してはいなかった。塔に入って色々調べると大金も置いてある。

イシスの方がいい装備を売っているので、イシスに向かい鉄の装備一式に変更した。

夜を待つために時間つぶしのように砂漠で戦闘を繰り返す。

しかし、攻撃に耐えられず宿屋で寝てしまう。うう……夜まで耐えることのできる耐久力が欲しいなぁ。

幻術・魔法封じ・力押し。砂漠には嫌な敵が多い。僕は砂漠を嫌いになってしまいそうだ。

ちょっと東に向けて進むと毒の沼に囲まれている家があった。当然向かい、メダルを手に入れた。

「オルテガは……」

またこの世界のお父様の話だ。やはり勇者は注目される運命にあるらしい。

買ったばかりの鉄の斧を試し切りしてみる。重たい。けどかなりの威力がある。

カザーブの北にある村に行くのを忘れていた。僕は向かう。そこ

に村がある限り。
nのフィールド……？いや違う。何かのモノによって村人たちの時間が止められていた。
やることは一つしっかりと盗んでいく。いや、世界平和に貢献するために借りていく。
カザーブの周りでうろうろと治安を守る。レベル上げが主な目的なのだが。

そろそろあの盗賊一味を倒しに行こう。そう思い、足を運ぶ。その足取りは重いけれども。
途中またマヒを食らわせてくる敵が出現。そいつらも蹴散らして、塔に辿り着く。
この前と変わらない陣形をとっている。まったく何もすることがないのだろうか。
「しつこいやつらだ！やっちまえ！」
ら？僕は一人しかいないのに。鉄の斧で子分一人はあっさり倒すことができた。
しかし、まだ二人も残っている。ふと見上げると親分のカンダタが斧を振り下ろしてきた。
斧で受け止めようとしたが、すでに遅かった。
痛恨の一撃！そんな文字が見えた気がする。そこで気を失った。

まだ勝てないのか。そんなわけがない。もう一度だ。もう一度あの塔に行く。
途中で毒を受けたが気にせずに進む。ＨＰが０にならなければ死ぬことはないのだから。
上の空だった。足を滑らせて塔から落ちる。……もう一度登りなおしだ。面倒くさい。本当なら飛べるはずなのに。
「しつこいやつらだ！」
僕自身もしつこいと思う。負けるわけにはいかない。また二発で

子分を沈める。
そして痛恨の一撃をまた食らった。痛恨の一撃だけはどうにもならない。
厳しい砂漠に身を置くことで修業をすることにした。
砂漠をうろついているとピラミッドがそびえたっていた。好奇心に負けて入ってみる。
敵が包帯をぐるぐる巻いている。俗に言うミイラなのかな。
敵が強かったのでここは後回しだ。

僕は一つの作戦を考えた。子分がの攻撃はそこまで痛くないのだからカンダタを狙って行けば勝てるのではないのかと。
もう二度も破れている相手。三度目の攻撃は必ず重い一撃が飛んできていた。
「しつこいや」
もうそのセリフも聞きあきた。さっさと戦闘に入ろう。
やはり子分を倒すことにした。ダメージの蓄積が激しい。
カンダタの注目の三度目の打撃。僕は防御の体制をとった。が飛んで来ない。その隙に子分が攻撃してくる。
子分を鉄の斧で仕留める。文字通り一対一だ。ＭＰは尽き薬草を頬張りながらの戦闘になった。
ちょっとお腹が痛い。痛恨は飛んで来ない。行ける！これならいける！

「倒した……僕は倒したんだ……」
「まいった！金の冠返すから許してくれよな！」
「許さん。二度も僕を倒しておいて」
「そんなこと言うなよ！な！な！」
「嫌だ」
「な！な！」
「分かった二度とするなよ」

僕は憤慨していた。しかし、何はともあれ金の冠を手に入れたのだった。
王に返還すると王の座を譲ると言ってきた。
「僕は女ですが……」
「そうか！よく見れば女ではないか！いい！いい！女王の誕生だ！」
「……」
失礼な人だなぁ。と思わざるを得なかった。

さて次は後回しにしていた砂漠を攻略していこうかな。
墓荒らしのようで気も引けちゃうけど、まぁいいよね。

砂漠に咲く一輪の花―ｐａｒｔ６―

ピラミッドでは包帯をぐるぐる巻いている男たちの攻撃がすごかった。
時折出る痛恨が僕の命を削っていく。だが負けるわけにはいかない。僕はここで魔法のカギを手に入れなければならないのだから。
……魔法のカギが入ってるであろう宝箱は仕掛けが施されていた。
ボタンが東と西に二つずつ。適当に押して行こうポチポチポチっと。
あ……開いた。僕の勘は冴えていたのかな。魔法のカギをとってすぐに出る。
これで色々なところに行ける。僕はロマリアに飛び、西に向かう。ここにはポルトガと言う城があり、王様に話をする。
「黒コショウが欲しい。コショウがあれば船を渡そう」
船。これがあればこの大陸全てに行くことができる。なんとしてもほしい。
「分かりました王様。僕がとってきましょう」
「それでこそ勇者だ！行け蒼の子！」
それだけで勇者なのか。ちょっと疑問に思ってしまう。
仕方ない。行こうかな。でも下準備はしないとね。

今日はまず、イシスが夜になるのを待とう。さっそく毒をもらってしまった。ん……どくけしそうがない。どこだろう。袋の中をごそごそと探す。奥の方に見つけてすぐに飲んだ。
入れなかったところに入り、本をもらっていく。イシスの城内に入りネコに話しかける。僕は何をやっているんだろう。
「くけけけ。アリアハンから来た勇者はてめーか」
「……」

「へっ、無駄だ。お前どうせ滅びる運命だ」
そう言って消えていった。あれはなんだったのだろう。でも私は気にしつつもピラミッドで手に入れた魔法のカギでさくさくと開けていく。この句の弊害は私なのかもしれないなぁと思ってしまうほどに。
城に入る。女王の部屋に侵入すると、一斉にきゃあきゃあと叫ばれた。
「男よ！男だわ！」
「……僕は女です……」
流石にへこむ。すぐに気づいてくれたらしく、叫ぶのを静止させた女王様には感謝だ。
「そこに……貴方の旅に役立つものが置いてありますわ」
手の差す方に行き、綺麗な花を見る。キラリと光が反射した方に手を伸ばすとそれは祈りの指輪だった・
こんな高価なものを。僕に。す具に女王の方を振りかえる。
「行きなさいな。私には必要ないものだわ」
一礼してその場を去った。いつか、この指輪が役に立つと時が来ると僕は思う。だから今は大事に指輪を袋の奥底にしまっておいた。

砂漠に咲く一輪の花―ｐａｒｔ６―（後書き）

ＰＶ１０００超えありがとうございます！楽しく書いていくので楽しく見れたらみてください！

私のサイトです興味があればどうぞ。

ｈｔｔｐ：／／ｓｈｅｎｇｎｏｖｅｌ．ｂｌｏｇ６９．ｆｃ２．ｃｏｍ／

武器への慣れ―ｐａｒｔ７―

今日は未開の地に行こうと思う。ポルトガの王様から気性の荒いドワーフへの手紙はもらっている。
手紙を渡すとついてこい。と言われたのでついていく。なんと開け方は壁に体当たりだった。
痛くないのかなぁ。なんてことを思う。何はともあれ、次の冒険の地に行くことができるのだから僕は文句は言わなかった。
何となく陰気臭い洞窟を出た。出た瞬間にモンスターのお迎えだ。僕は鋏使いだったはずなのに、ずいぶんと鞭になれている気がする。
敵の猛攻を受けてしまい倒れる。倒れる意識の中、少しだけ懐かしい感触を感じた。
「おお　あおのこ！死んでしまうとはかわいそう！」

へぇ、記録してもらう場所により、セリフが変わるんだ。死にたくはなかったけど。
あれだけ贈り物をして持ったのに、倒れるとは少し情けなかった。
城は二階建てなのでぴょんと飛んで外に出る。この肉体も結構頑丈なものだなと思ってしまう。
僕は負けない。アッサラームを出てバハラタに辿り着きたいんだ。
しかし、回復魔法がホイミしかないとは難儀なものだ。モンスターの大群が出てきた。今の僕は逃げる一択だ。二回失敗してしまったがなんとか生き延びた。

バハラタに辿り着くとなかなかにいい装備を取りそろえていた。
魔法の盾が素晴らしい出来だった。が、お金がなかったので少し後に回す。
とりあえずポルトガの王様に黒コショウを差しだすために黒コショウの店に行くことにした。

「旅人よ聞いて下され」
いきなりおじいさんが話しかけてきた。通りすがりの人に話しかけるのはこの世界の常識なのだろうかと疑ってしまう。
長い話を一時間あまり聞かされることになった。
要はタニアっていう人がかわいい。さらわれた。助けて。だそうだ。短くすればこれくらいで収まるのになぁ。
「僕が行きます！」
グプタというタニアの恋人が助けに行った。協力するとか言えばいいのに。なんだか、わからない。とりあえず行ってしまったのだから任せてしまおうかなとも思ってしまった。

武器への慣れ―ｐａｒｔ７―（後書き）

鋏から剣や鞭へ……ＤＱ３って装備すげえなぁ

私のサイトです興味があればどうぞ。

ｈｔｔｐ：／／ｓｈｅｎｇｎｏｖｅｌ．ｂｌｏｇ６９．ｆｃ２．ｃｏｍ／

夢見たルビー―Ｐａｒｔ８―

そう言えば、ノアニールの人たちは眠っていたっけか。ちょっと解決しに行こうかな。

洞窟の前に小さな草原があったので、そこに住んでいる人に話しかけた。

「きゃー！人間よ！」

「人間と話してはいけないってママに言われているの」

話しかけても返答がない会話だった。どうやら種族はエルフらしい。よく見ると耳が人間より断然ながい。

そのまま奥に行くとエルフの長らしき人がこっちを見ていた。

「なんですか？」

「人間などは見たくない。帰ってください」

ちょっとうろうろしていると小さなメダルを見つけた。これで合計二十枚になったのでアリアハンに即刻戻り、刃のブーメランを手に入れた。鞭がグループならば、ブーメランは全体。所によって装備変更が好ましいだろう。

それにしても私は何使いになっていくんだろう……この身体じゃ鋏を使えないのが悔しい。

ポルトガで鋼の鎧と魔法の盾を、そしてポルトガでは鋼の鞭を。これで現段階では最強の装備である。

これで冒険の準備は整った。ノアニールの事件を解決しよう。夢見るルビーを手に入れなければならない。

洞窟の中に入る。じめじめして嫌な感じがするが、怪物そのものはそこまで強力ではなかった。

気をつけないといけないのがヒャドという氷の魔法が痛いくらいだ。頑張らなければならない。

山場はなかった。最深部に辿り着き、夢見るルビーを手に入れた。そこには遺書らしきものがあった。
「先立つ不孝をお許しくださいと」
この遺書は口で伝えることにはしなかった。だって最後の文字はみたいよね。誰だって。
僕は見せたくないけどね。アリスになるんだから。

夢見るルビーを見ていると身体の底がしびれるような気がした。宝石とは甘美なものなのだろうか。
ちょっと手放すのは惜しいけど長には……母親にはきちんと返そう。遺書も添えて。
「そう。でも人間とは話したくはないです」
僕はこの世界では人間なのだ。人形ではない。
すっと離れる。エルフの目には水たまりができていて、それが今にもこぼれそうになっていた。

夢見たルビー―ｐａｒｔ８―（後書き）

甘い夢は美しかった。もう遅い過去の事。

私のサイトです興味があればどうぞ。

ｈｔｔｐ：／／ｓｈｅｎｇｎｏｖｅｌ．ｂｌｏｇ６９．ｆｃ２．ｃｏｍ／

ピラミッドの呪い―ｐａｒｔ９―

不思議な粉をもらい、これをノアニールの村にばらまいた。すると眠っていた人々が目覚めた。
眠っていると成長もせず、老化もしない。流石エルフの呪いと言ったところか。
そして気付いているのは僕と、僕に頼みごとをした老人……。時の流れっていうのは寂しい気がするよ。

僕は強くなった。そう思いたい。これだけの冒険を繰り返してきて、何度も何度も死んだ。僕はピラミッドに再度乗り込んだ。
呪いよりも強いことを証明するために。宝箱を開けるとそれは人食い箱だった――――

――――何もわからないまま終わった。回復も間に合わず、攻撃もさせてもらえず。何もできないことを思い知った。
宝箱を開けることが怖くなってしまったのはこれが悪い。
奥の財宝には人食い箱ではないだろうと思い開けていく。
「王様の財宝を荒らすのは誰だ……」
「われらの眠りを妨げるのは誰だ……」
僕です。世界を救うために奪っていきます。貴方達の安息を妨げてすいません。それでも僕は奪っていく。
包帯ぐるぐる巻きの男たちが迫ってくる。ムチで一掃していく。
全て取り終わった後には宝箱の前に四十八の死体が転がっていた。

ピラミッド屋上にメダルが一つ落ちてあった。誰なのだろうかこんなところに置いていったのは。
ピラ地下に潜入することに決めた。情報では地下に黄金の爪が置いてあるらしい。さらには呪文が使えないらしい。

薬草を買い込み、ピラミッドへ向かう。黄金の爪は厳かな棺に入っていた。
何か禍々しい気もしたがそれを取り出す。
「わざわいあれ！」
不気味な声が聞こえたと同時にモンスターの気配がぐっと上がった。これはまずい。遅い来る毒牙。僕の身体は徐々に蝕まれていった。
中でも包帯男の痛恨の一撃が痛かった。
だがなんとか、出口に辿り着き爪を手に入れた。もうピラミッドには金輪際入らないだろうと思っていた。思おうとしていた。

さて。次はさらわれた人でも助けに行こうかなぁ。まだ戻ってきていなかったらしい。
仕方ないと一つため息をついた空の色は、あの日見た蒼い空だった。

ピラミッドの呪い―ｐａｒｔ９―（後書き）

一歩ごとのエンカウントはきついですＯＴＺ

私のサイトです興味があればどうぞ。

ｈｔｔｐ：／／ｓｈｅｎｇｎｏｖｅｌ．ｂｌｏｇ６９．ｆｃ２．ｃｏｍ／

初心忘るべからず―Ｐａｒｔ１０―

バハラタから出て、橋の先に小さな洞窟を見つけた。これがバハラタでの町人から聞いた盗賊の住処なのだろう。
盗賊の住処とだけあって宝箱が無造作に置いてある。盗賊が盗んだものは、後で平和と言う形で盗まれた人々に返していこう。
パカパカぱかっと。それにぱかっと……

ひ　と　く　い　ば　こ　が　あ　ら　わ　れ　た

「終わった……」
そうつぶやいた次の瞬間にはイシスに戻っていた。
「かわいそうに」
言われなくてもわかっています。
あの宝箱だけは絶対に開けてはならない。そう思い、鍵をかけている厳重な扉をピッキングする。
階段を下りるとそこには……
「なんだお前は？おかしら今は留守なんだ」
「ここに捕らえられている人を助けに来た」
「じゃあ通すわけにはいかねえな……やっちまえ！」
案の定戦闘をしなければならなくなった。数は四人。グループになっているため鞭でシバクことができる。
ちょっとセクシーに闘っている気がする。恥ずかしい。鞭で全員倒した後にはハッピーエンド。
「助けてください！私はバハラタのタニアです！」
「そこにレバーがあるはずだ！」
壁にある大きなレバーを動かすと何をしても開きそうにない扉が音を立て開いた。
「あぁタニア！」

「えぇグプタ！」
二人はここがアジトなのを忘れているのかくるくると回り出した。正直迷惑極まりない気がする。
ハッと我に返ったのか、二人は駈け出して行った。怒らないように深呼吸をして、二人を追いかけた。
すると、どこかで見たような顔を見かけた。
「お前は……あのときの！」
「すまない……僕は君が誰だか覚えていないんだ」
「俺はカンダタだ！勝負！」
バカップル二人が捕まっているため戦わざるを得なかった。三対一。それでも負けるわけにはいかない。
だが、ホイミが追いつかない。じり貧の展開。ＭＰが尽きるのが先か、君のＨＰが尽きるのが先かの勝負になった。

目を覚ますとまたイシス。かわいそうなのには慣れました。僕はちょっと性格が曲がってきているかもしれないと思ってしまった。
まだ、勝てない。やるべきことを先にするためにダーマへと向かった。僕に足りないのは回復手段だった。ホイミだけでは追いつかない。ならば先に倒すしかないのだ。
ダーマでは転職が行えると言うらしい。が、勇者は生まれつき特別なものであり、できないと言われてしまった。寂しい。変わらないはずなのに変わっている人間と言うのがすごく寂しかった。
ここに来たのは完全に無駄ではなかった。袋に名前を付けてあげた。
僕は初心を忘れない。一生一度たりとも。それを誓い、袋の名前をスライムを文字って「スラリン」と名付けることにした。

ダーマの北東に向かう。ムオルという町の情報を聞いたからだ。入ると久々に温かい喧騒に包まれた。
「ポカパマズさんじゃないか！」

街を回るとみナがポカパマズと呼んでくる。僕の名前は蒼星石。皆は通称で蒼の子と呼ぶ。

オルテガという、この世界では僕のお父様であるオルテガがこの町ではポカパマズと言う名を使っていたらしい。

そしてオルテガの兜をもらいうけた。微かにお父様の温もりが残っている気がした。

いまだ見たことのないお父様。この世界でもあの世界でも。

僕はお父様を見ることができるのだろうか――――――――

初心忘るべからず―Ｐａｒｔ１０―（後書き）

ええい！リア充め！

私のサイトです興味があればどうぞ。

ｈｔｔｐ：／／ｓｈｅｎｇｎｏｖｅｌ．ｂｌｏｇ６９．ｆｃ２．ｃｏｍ／

ニセの王様―ｐａｒｔ１１―

カンダタとの戦闘は苛烈を極めた。カップル二人は放っておいてひたすら回復と攻撃の繰り返しだ。相変わらず固いし強い。
痛恨で命を持っていかれることもよくあった。

何度目かの対戦。今度は準備もばっちりだ。お父様のぬくもりのある兜もあるのだから。
痛恨が飛んで来ない。運にも恵まれたのか僕は何とか勝利収めることができた。
そしてなんとグプタは黒コショウの売り手だったのだ。お金はいらないと言われ、ただで高価な黒コショウをもらうことができたのだ。
人助けってリターンは大きかった。

すぐにポルトガに行き、コショウを献上すると船を差し出してくれた。なんて太っ腹なのだろうか。僕には信じられない。
アリアハンの王様とは格が全然違うことを感じた。
初めて船旅。僕は酔ったりはしなかったが海の魔物が少しうるさかった。

アリアハンを西に進み、ランシールと言う場所に辿り着いた。
ここは神殿があり、オーブと言う財宝を保管しているらしいが、魔法のカギでは鍵穴があわないらしい。
要は出直してこいと言うことだ。
次なる場所を目指す。特に目的のない船旅。バラモスを倒したいのだが、辿り着くのはかなり難しい。
お城に着いた……が、田舎者は帰れと言われ帰宅。一泊することにした。

まだまだ船旅は続く。イカが異常に強いのにタコが出てこない。ここではタコは絶滅してしまったのだろうか。
レベルだけは上がっていく。僕自身が強くなっていく。
海賊たちの住処に辿り着いた。僕のうわさは届いているようだ。なぜか僕のことを知っているらしい。
海賊のおかしらに会うと
「女のあたしがおかしらやっているのはおかしいかい？」等と聞かれた。
「はい。女性がすることではないと思います」
こくりと頷く。おかしらは気さくに笑い方をばしばしと叩きほめてくれた。あんたも魔王討伐を頑張りなさいよ。
理解を示してくれるなんていい人だなぁと思ってしまう。
ここはもう少し後回しにしよう。

海を渡り、ジグザグ迷路を探検する。すると小さな村があったのでそこに入り、長に情報を聞いた。
「ここスーの村よくきた」
「私たち嘘つかない」
「渇きのつぼもともとこの村のもの」
カタコトに聞こえるがあえて聞き流す。きえさりそうというものがあったので買い、さっきの通せんぼさんをかわそうと心に決めた。
うまく成功した。城の名はエジンベアと言うらしい。
僕のことを田舎者田舎者と叫んでくる。王様でさえだ。なんだか腹立たしいが太っ腹なので、よしとする。
城の最深部には罠が仕掛けられていて、三つの石を所定の場所に置くと扉が開いた。
かわきのつぼというアイテムがあったのですぐさまもらいうける。
船旅におかしなところがあった。浅瀬が微妙にある場所にツボを

掲げると祠が出てきたので中に入ると最後のカギが置いてあった。
素晴らしい。
「ネクロゴンドに災いありき……」
奇妙な言葉を残して去って行った骸骨。傍から見ると多分不気味な光景だったのだろう。

そして最後のカギの恩恵を受けるべく色々なところに飛びまわる。
ロマリアでは盾の硬度は最強の風神の盾。小さなメダル。そして情報をひたすら集めた。
旅の扉を駆使して世界を飛ぶ。ちょっと酔ってきた。クラクラしてしまう。

城下町が見えたので、そこに入る。
いきなり葬式が起こっていたので、何事かと思う。なんでも悪口を言っただけで処刑されてしまった。
なんてひどいんだ。僕は王様のところに殴りこみにいった。
「なにをしているん」
「ひっとらえて牢屋に入れておけ！」
有無を言わさず僕は捕まってしまった。
牢屋では悪政をしている王様に不満を抱くものが多いらしい。
僕は本物の王様が牢屋にとらわれているのを見つけて、必ずあの王様の正体を暴こうと思った。
「ラーの鏡があれば変化を解くことができる」
「僕に任せてください」
すっかり人助けの根性が染みついてしまった気がする。

さぁ、僕の力と相談して次はどこに行こうか。

ニセの王様―ｐａｒｔ１１―（後書き）

カンダタはソロだと結構強かった・・・

私のサイトです興味があればどうぞ。

ｈｔｔｐ：／／ｓｈｅｎｇｎｏｖｅｌ．ｂｌｏｇ６９．ｆｃ２．ｃｏｍ／

宝箱は疑え―ｐａｒｔ１２―

黄金の国ジパングに行き、色々と物色。金目のものがなくて残念。
「そうそうに立ち去れ」
そんなことを言われてしまった。日本人は気難しい。何か不吉なものを感じてしまったのは事実だった。

ジパングの人々を助けよう。そう思い、おろちを倒しに行こう。
メタルスライム軍団が襲ってくる。幸先はいいのだが、どうにも逃げられてしまった。
溶岩に囲まれ、さらにマグマ。これは熱い。汗すらも蒸発してしまう暑さだ。
途中メダパニをもらってしまい、混乱してしまったが、間違って攻撃する仲間もいるわけではなく、あっさりと倒していく。
咆哮が聞こえる。八岐大蛇とはよく言ったものだ。これは対峙しただけで吹き飛ばされそうな威圧感を感じた。
やくそうとＭＰをありったけにつぎ込み倒そうとする。
燃え盛る火炎は熱いが大したことではない。むしろ二度の攻撃が痛い。
こっちは一度しか動くことしかできないのに二度動けるなんてずるい。
ラリホーが運良く効き、回復に専念する。がいかんせん二度の攻撃で見る見るうちにＨＰが減っていく。

ぐはっ……壁に叩きつけられて意識が飛んだ。
「おお　蒼の子！死んでしまうとはなんと田舎者じゃ！」
エジンベアではこのように返されるらしい。じゃあ生きていたら都会人なのでしょうかと小一時間問いたいものだ。
しかし、それは置いといて絶対に勝てない。ダメージが回復をう

輪待っているので何をどうやっても勝てない。
まだ力不足のようだ。
ランシールに行き、地球のへそと言う場所で自己を鍛錬することにする。
宝箱も結構あるので開けていくパカリパカリっと
ミ　ミ　ッ　ク　が　あ　ら　わ　れ　た
大丈夫僕は強くなった。ほら攻撃もあまり効かないじゃないか。
ザ　　ラ　　キ　　！
……あれはずるい。一瞬で昇天してしまった。
そしてまた戻る。あの宝箱は無視することに決めた
「立ち去れ……」
「僕は立ち止まるわけにはいかない」
「立ち去れ……」
「負けるわけにはいかない」
「なぜそうまでして？」
「この世界を僕は守るんだ」
「そうか……正直に生きることだな」
最深部に辿り着くと神秘的な輝きを見せるブルーオーブを見つけた。
このオーブには親近感がわいたのは言うまでもない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1549l/

蒼星石が世界を救う

2010年12月7日07時30分発行